

フォーラム おおさか

E-mail : jchikencenter@ns.jichiro-osaka.gr.jp

●発行 PLP 会館 大阪地方自治研究センター

●連絡先 大阪市北区天神橋3-9-27 PLP 会館 Tel : 06-6242-2220 Fax : 06-6242-2224

CONTENTS

2023年 10月号 NO.174

2023年の世間 P. 1-4

■ PLP 会館 大阪地方自治研究センター 研究員 尹 誠國

P. 1



2023年の世間

■ PLP 会館 大阪地方自治研究センター 研究員 尹 誠國

9月23日から10月8日まで中国の杭州でアジア競技大会が開催された。参加する選手たちは必死に勝負に臨んだだろうし、筆者はそれなりに面白く、楽しんだ部分もある。勝敗と言えは戦争がある。勝敗は兵家の常とは言うが、最近のウクライナ戦争を見るとどうもそうはいかないようだ。プロイセンの将軍カール・フォン・クラウゼヴィッツが『戦争論』で言った“戦争は異なる手段による政治の延長”という言葉が心に響く。終わる気配が感じられないウクライナ戦争だが、今度は中近東情勢が怪しい。民間人の死傷者も多数出ているらしい。ウクライナも中近東も一刻も早く事態が収束し、平和を取り戻すことを祈念してやまない。

憂鬱なニュースの多いこの頃なので、気分転換の意味も込めて、本号では映画を通して、普段接することがあまりないテーマに触れる。そして、最近日本のメディアを賑わせた韓国のある政治家に注目し、今後の韓国政治を展望する。

23 映画で学ぶこと —「シッコ」、「世界侵略のススメ」

筆者は語学が好きなので、いろんなテキストや教材を使っている。約30年前、韓国で日本語の勉強を始めた頃は主に紙ベースの教科書で単語や文法を覚え、カセットテープで日本のニュースやドラマを聞いたりした。また、短波ラジオで日本だけではなく世界各国の日本語放送を聞いて学習した。日本語だけではなく、英語とかいくつか外国語を独学で学んでいて、最近は紙のテキストより YouTube やドキュメンタリー、映画などを見る機会が増えている。紙のテキストに比べ本棚のカッコ良さという意味では負けであり、当然一長一短はあるが、時代の流れには逆らえないし、もちろん効率的な部分も多々ある。

そして、映画は語学の勉強だけではなく、その国の文化や国民性が見えてきて感情移入もできるし登

場人物にある意味では共感できる部分も多い。筆者の幼い頃の韓国では映画館に行く機会があまりなかった。しかし、たまに映画を見に行くと、スクリーンだけがやたら大きく明るく感じられ、後ろの方から映写機が回る音だけが微かに聞こえていた。筆者が京都に来た頃は主にDVDで映画を見ていたため、英語の勉強のための映画鑑賞という目的もあって、英語の字幕付きの映画を探すために必死であった。だが、最近では映画配信サービスも多く、筆者も会員になって利用している。

●『シッコ』

まず、『シッコ』というアメリカ映画がある。「シッコ」とは、狂人、変人を意味するスラングらしい。アメリカのマイケル・ムーア監督のドキュメンタリー作品である。この映画では、アメリカの社会保障、医療保険政策や社会福祉政策を取り上げ、面白おかしく表現しているが、その一方、非常に厳しく批判もしている。筆者個人的には世界一の先進国と言われているアメリカ社会の、先進国らしくない一面が良く分かる映画であると思う。

●『世界侵略のススメ』

次に紹介する『世界侵略のススメ』もムーア監督のドキュメンタリー作品である。侵略と言っても戦争映画ではなく、世界各国の様々な分野についての仕組みや考え方を必要に応じてアメリカと比較しながら紹介している。そして、本当の幸せとは何なのか、政策はどうあるべきかを考えさせられる映画で、筆者が担当している大学の授業でも学生に見せたりしている。

この映画で取り上げているテーマは、教育・学校給食・仕事・医療・犯罪・刑事政策・金融・ジェンダー・歴史認識など実に多岐にわたる。もう少し具体的にこの映画の内容を紹介しよう。イタリアに行ったムーアはあるカップルにインタビューをして暮らしぶりを聞く。そこで彼が衝撃を受けたのは、年間8週間も有給休暇があり、会社の昼休みは2時間という労働環境。彼によると、アメリカではそれは非常識なものらしい。

次に向かったのはフランスのある小学校。ここでは給食がフレンチフルコースであることに衝撃を受ける。彼がアメリカの給食の写真を子どもたちに見せると、“それ食べられるの？”と驚き、逆に衝撃を受けていた。

次はフィンランドである。ここでは“宿題はさせない”“規格された教育は意味がない”“生徒発でや

りたいことに取り組んでもらう”という、現場の教員からの意味不明な提案があった。それが、世界一の学力を維持するフィンランドの秘訣であることに納得がいけないムーア監督だ。そしてポルトガルでは麻薬使用が犯罪にならない。ドイツでは休日に社員に電話をすると法律違反になる。週の労働時間はわずか36時間だ。また、イスラムの国である北アフリカのチュニジアでは、中絶費が無償だという。

次に2008年にリーマンショックの影響をもろに受け、国家破綻寸前まで陥ったアイスランドだが、唯一、国有化されなかった銀行を救ったのは危機管理能力に優れた女性の経営者だった。議会も4割を女性が占め、世界初の女性大統領を輩出したのもアイスランドである。スロベニアでは大学の学費が一切かからないそうだ。大学の学費がかからないとは羨ましい限りである。

筆者がこの映画で最も驚いたのはノルウェーの刑事政策であった。一軒家の牢屋もあるノルウェー。死刑制度はなく、懲役刑の最高は21年だが、再犯率は世界最低らしい。

実際、監督自身がノルウェーの刑務所に行って受刑者から話を聞き、中の様子を紹介している。一軒家の刑務所は普通の街中にある家と同じような感じだ。刑務所と言われないと気づかないだろう。一軒家の刑務所の所長にムーア監督が聞いた。“この何が刑罰なのか”と、これに対して所長は“家族と連絡が取れないことだ”と答えている。

一方、重罪犯を収容する刑務所は外から見れば警戒態勢が敷かれているようで、やや不気味な印象を受ける。しかしながら受刑者を収容する部屋は個室になっていて、どこかのホテルと言われても全く遜色のないような設備が揃っていた。服役期間中であっても社会と完全に隔離されているわけではないと筆者は思った。社会に出て職に就くための勉強もでき、選挙が近づいてくると政治家が刑務所を訪れて選挙運動をするらしい。もちろん職員を対象としてではなく、受刑者という有権者を対象としてである。そして一軒家の刑務所では、受刑者は包丁やナイフを使って料理もしている。受刑者の一人が包丁をムーア監督に見せ、“これは武器ではありませんよ”と笑う。また、職員もピストルとかの武器は持っていないらしい。不思議に思ったムーア監督が理由を聞いたら、“別に要りませんから”と答える。

2 誰にも復讐する 権利はありません

2011年7月22日、ノルウェーのオスロで行政機関

の庁舎 (Regjeringskvartalet) が爆破され、続いてウトヤ島で銃乱射事件が発生した。庁舎爆破事件により8名、銃乱射事件により69名、あわせて77名が死亡し、319名が負傷した。ノルウェー国内において第二次世界大戦以降の最悪の惨事とされている。

実行犯は、ノルウェー防衛同盟に一時所属し重要な役割を担っていた。イングランド防衛同盟の関係者と面会するなど、国内外の極右組織と関係があり、同人がノルウェー内外の極右運動と接点を有していたことから、極右運動によるテロとされている。ウトヤ島銃乱射事件での死者には王太子妃の義兄が含まれていた。

この事件の被害者の一人の父親がインタビューに応じ、自分の息子は泳げたら助かったかもしれないとして悔んでいた。そして、誰にも犯人に復讐する権利はないと言っている。

23 目には目を、歯には歯を？

「目には目を、歯には歯を」という言葉を聞くと復讐を思い起こす読者も多いだろう。そして同時にこの言葉の意味を誤解している人もまた多いと思う。この言葉の真意は、他人の目を害した者は自らの目をもって償い、歯を害した者は自らの歯を持って償わなければならない。つまり、償いの程度は被害と同等でなければならないということである。要するに、過剰な復讐をしてはいけないという意味である。

罪を犯した人間を、いわゆる収容施設に収容することによって、社会から一定期間隔離するのは現代の刑罰の仕方の一つである。収容施設の中での処遇の仕方も国によって様々である。この映画でノルウェーの刑務所を見て、筆者個人的にはいろいろ考えさせられた。受刑者は社会に迷惑をかけたのに、この処遇は良すぎるのではないかと正直驚いた部分もある。だが、よく考えたら、社会に迷惑をかけた人間の収容施設の処遇がこんな感じで、受刑者の人権をこれだけ保護しているわけだから、迷惑をかけないで日々一生懸命暮らしている人々の人権はそれ以上にちゃんと保護しているのだろう。

23 韓国政治 —2024年国会議員総選挙の行方

最近、日本のメディアを賑わせたある人物がいた。韓国の国会で最大議席を誇る「共に民主党」の李在明 (イ・ジェミョン) 代表である。その彼に対して検察が逮捕状請求をした。

国会で最大議席を誇るとはいえ、「共に民主党」は、韓国では与党ではなく野党である。韓国では大統領制を採用していて、国会の議席数に関係なく、大統領とつながりのある政党が与党になる。なので、韓国では「少数与党」、「与少野大」という言葉が良く使われる。「捻じれ国会」のようなイメージである。現在の与党は「国民の力」である。

23 李在明代表逮捕同意案の可決

大韓民国憲法第44には次のように規定されている。①国会議員は、現行犯である場合を除き、会期中国会の同意なしには逮捕または拘束されない。②国会議員が、会期開始前において逮捕または拘束された場合は、現行犯ではない限り、国会の要求があれば、会期中は釈放される。

検察は逮捕状請求の理由として、北朝鮮に対する不正送金に関与した疑いや「柏峴洞 (ペクヒョンドン) 開発事業特惠 (斡旋収賄に類似。筆者注) 疑惑」を挙げていた。野党「共に民主党」代表李氏に対する逮捕同意案を韓国国会は9月21日採決し、賛成149、反対136、棄権6、無効4で可決した。可決に必要な出席議員の過半数は148である。つまり、政府・与党・検察にとってはわずか1票差での勝利となった。投票に参加した民主党議員は167名である。つまり、民主党の中から30名ほどの造反者が出たことを意味する。

23 逮捕状請求の棄却

国会での同意案可決を受け、逮捕状発布の是非を判断する裁判所の令状審査が実施された。韓国では検察によって逮捕状 (韓国では「拘束令状」と言う) が請求されると、裁判所によって逮捕が妥当かどうかの審査が行われる。これは国会議員でも例外ではない。結果的に9月27日に李代表に対する逮捕状は棄却された。

23 今後予想される展開

李代表は、2022年3月9日に行われた大統領選挙で尹錫悦候補に僅差で負けた。李候補の得票率は47.83%、尹候補は48.56%と僅か0.73%の差であった。そして、2022年5月10日、第20代大統領の就任式が行われた。

尹政権は選挙結果が僅差だということもあり、「検察共和国」と揶揄されたりするなど、誕生直後から

逆風に晒されている。そして、経済政策、住宅政策、外交政策などの失敗だけでなく、候補者時代から続いている妻をめぐる様々な疑惑、外交舞台における失態などが重なって、支持率はかなり低迷している。支持率低迷にさらに追い打ちをかけたのがソウル特別市江西区の区長選挙である。

10月11日に行われたソウル特別市江西区の区長選挙で「共に民主党」の候補が当選した。事前投票の段階から有権者の関心はかなり高かった。筆者も関心があったため、ユーチューブなどで有権者の反応を見たら、やはり尹政権の「失政」に審判を下し、「国際社会において失墜した韓国の地位」を取り戻すチャンスであるとの意見が多かった。蓋を開けてみると、「共に民主党」の候補の支持率は56.52%、「国民の力」の候補の支持率は39.37%で、「共に民主党」の候補に軍配が上がった。得票率としては、17.15%の差が開いている。尹政権が国民からどのように見られているか、ある意味では非常に分かりやすい結果であると言えよう。

2024年4月には国会議員総選挙が行われる。その意味で今回の区長選挙は国会議員総選挙の前哨戦とも言える。今のままの勢いでは、「共に民主党」の

圧勝を予測するのはあまり難しくないであろう。「共に民主党」の圧勝は「国民の力」の惨敗を意味する。

韓国の国会議員選挙は大統領の任期の途中に行われる。アメリカの中間選挙のような位置づけだ。いわゆる「政権審判」としての意味もある。尹大統領の任期は5年なので、任期満了は2027年4月だ。そして、現在の大韓民国憲法の規定では再任はできない。次の大統領選挙に李代表の立候補を疑う人は殆どいない。当選の可能性も十分すぎるほどある。また、国会議員の任期は4年で、次の総選挙で選ばれた国会議員の任期満了は2028年の5月となる。

仮に、「共に民主党」圧勝と言うシナリオが実現したら、尹大統領の退任まで「共に民主党」が国会の多数議席を占めているという状況が変わる可能性は殆どない。そして、次期「大統領李在明」というのも十分にありえる。そして現職大統領の弾劾、大統領経験者の投獄という不幸な歴史が繰り返される可能性も無きにしも非ずである。

逮捕同意案の可決によって政治生命が危ういとされていた李代表だが、逮捕状請求の棄却によって韓国政治の不透明感はさらに増した。視界ゼロである。今後、目が離せない韓国政治である。

参考資料

- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8E%E3%83%AB%E3%82%A6%E3%82%A7%E3%83%BC%E9%80%A3%E7%B6%9A%E3%83%86%E3%83%AD%E4%BA%8B%E4%BB%B6>
- <https://jbpres.ismedia.jp/articles/-/77093>
- <https://tatsumarutimes.com/archives/7873>

